

2025.6.22.

「見よ、神の小羊」

旧約 出エジプト記 12章 21－28節

新約 ヨハネによる福音書 1章 35－42節

1. はじめに

ヨハネによる福音書を共に読み進めております。先週は、イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた記事から御言葉を受けました。今朝与えられております御言葉は、イエス様が最初の弟子を取られた場面です。この場面は、他の福音書が記すことと、このヨハネによる福音書が記すことは、かなり違います。他の三つの福音書、マタイ・マルコ・ルカの三つは共通の観点から書かれたということで共観福音書と呼ばれますが、ヨハネに福音書だけは他の三つとはいささか違う観点から記されています。ヨハネによる福音書独特の言い回しや表現、あるいはヨハネにらよる福音書にだけ記されている出来事というものもあります。今朝与えられている所は、その様にヨハネによる福音書だけに記されている場面となります。このような場面に出会いますと、イエス様の弟子が召された時のことは、「どっちが本当だったのだろう」と私共は考えがちです。しかし、それはあまり意味がないと私は考えています。そんな事より大切なことは、ヨハネによる福音書はここで何を私共に語ろうとしているのか、それを聞き取ることです。

ちなみにイエス様が初めて弟子を取られた場面は、マタイとマルコにおいては、イエス様が漁師であるシモンとアンデレがガリラヤ湖で網を打っているのをご覧になり、「私についてきなさい。人間をとる漁師にしよう。」と言われて二人を召し出したと記されています（マタイ 4:18 ～、マルコ 1:16 ～）。また、ルカにおいては漁師が上がって網を洗っている時に、シモンの船に乗り「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をきなさい。」と告げると、シモンは「わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみしましょう。」と答え、網を降ろすとおびたしい魚が網にかかりました。それからイエス様はシモンに「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」と告げられ、弟子となったと記されています（ルカ 5:1 ～）。ところが、ヨハネによる福音書では、最初の弟子がシモンと兄弟アンデレであったことは同じですが、彼らが漁をしていたとか、網を洗っていたとか、その様な場面は全く記されておりません。そもそも、漁師であったことさえ記されておりません。それは、ヨハネの福音書は「イエス様の弟子となるということはどういうことなのか？」そのことを、使徒達が召し出された時のことに重ね合わせるようにして、この福音書を読む私共の上にも起きている事として示そうとしたからではないかと思われます。

2. 洗礼者ヨハネの証言によって

最初にイエス様の弟子となったのは、洗礼者ヨハネの弟子であった二人でした。この二人の内の一人はシモンの兄弟のアンデレでした。もう一人の名前は記されていません。

まず、洗礼者ヨハネがイエス様の歩いているのを見つめて、「**見よ、神の小羊だ**」と告げました。この「神の小羊」という言葉の意味は、先週申し上げましたように、出エジプトの出来事の際に神様がエジプトに与えた 10 の災いの最後の災い、過越の出来事に由来します。エジプトの全ての初子、家畜から王様の子まで全ての初子を神様は撃つ。その際に、イスラエル家はその災いが過ぎ越して行くように、門の柱と鴨居に小羊の血を塗るように神様はお命じになりました。そのために屠られた小羊、それが「神の小羊」です。イエス様を「神の小羊」と言うということは、洗礼者ヨハネには神様から「イエス様の血」、これは勿論十字架の血ですが、これによって神様の裁きが私共を過ぎ越して行く、つまり私共が救われる、そのことを知らされていたということでしょう。このように、イエス様を救い主・キリストと指し示すために遣わされた者、それが洗礼者ヨハネでした。そして、この洗礼者ヨハネによる「見よ、神の小羊だ」という言葉を聞いて、洗礼者ヨハネの弟子の二人がイエス様に従ったというのです。この二人は洗礼者ヨハネの弟子でしたから、洗礼者ヨハネを信頼していたに違いありません。その洗礼者ヨハネがイエス様を「神の小羊」と言われる。このヨハネの二人の弟子は、この言葉の意味を洗礼者ヨハネから、既に聞いていたのでしょうか。それで、イエス様に従うことにした。実際、洗礼者ヨハネの弟子で、その後イエス様の弟子になった人は、少なくなかったと思います。

ここには、イエス様に従う、イエス様の弟子となるという出来事は、既にイエス様を知っている者の証言を聞いて、それを受け入れ、それを信じて起きる事だと告げているのでしょうか。私共がイエス様に会って救いに与った時のことを思い起こせば、この時と同じことが自分の上にも起きたことは明らかです。皆さんは、どんなきっかけで教会に来られましたか？自分の両親なのか、友人なのか、或いはキリスト教の学校に通っていた時の先生なのか、誰かに誘われ、勧められて教会に来られたのでしょうか。既にイエス様の救いに与っている人、しかも自分の信頼する人、その人に誘われて教会の門をくぐった。あるいはキリスト者の本を読んで、教会に行ってみたと思って門をくぐられた方もいるでしょう。いずれにせよ、誰かのイエス様についての証言を聞いて、それでイエス様のもとに来た、ということでしょう。何の導きも招きもなく、ただ自分の心の欲するままにキリストの教会に来たという人はまずいないでしょう。当たり前のことです。最初の弟子もそうだったというのです。

3. アンデレからシモンへ

このことは、今度はアンデレがイエス様を「メシア、キリストである」と証言し、その証しによってアンデレの兄弟シモンがイエス様の弟子となったことが記されています。41 節以下です。ア

ンデレは自分の兄弟シモンに「**わたしたちはメシアに会った**」(41 節)と言って、シモンをイエス様の所に連れて行きました。アンデレは洗礼者ヨハネの弟子でしたけれど、洗礼者ヨハネがイエス様に対して「見よ、神の小羊」と告げたのを聞いて、イエス様に従いました。そして、イエス様のもとに泊まり、彼はイエス様がキリストであることを確信しました。そして、そのことを今度は兄弟シモンに伝え、そしてシモンをイエス様の許に連れてきました。これが世界で最初の家族伝道です。この家族伝道は成功し、シモンが弟子になります。

ここで面白いことが起きています。洗礼者ヨハネの言葉を聞いてイエス様に従ったアンデレは、今度は自分が兄弟シモンの所に行って、イエス様がメシア・キリストであることを証しし、兄弟シモンをイエス様の御許に連れてきました。そして、シモンがイエス様の弟子になりました。イエス様が誰であるかを知ったのならば、それを誰かに言わなければいけない、伝えなければいられなくなり、イエス様のことを伝える。イエス様の所に連れて来る。それが聖霊なる神様のお働きによって為され続けている伝道というものです。これがキリストの教会 2000 年の歩みの中で、ずっと営まれ続けてきたことです。「これまでも」、「今も」、そして「これからも」です。

4. ケファと呼ばれる

この時、初めて遭ったイエス様からアンデレの兄弟シモンに「あだ名」と言っても良い名前が与えられます。それが「ケファ」という呼び名です。「ケファ」と言われてもピンと来ない人もいるかもしれません。この「ケファ」という言葉は、イエス様がその当時日常において使っていた言葉で「岩」という意味があります。この「ケファ・岩」という言葉を、新約聖書が書かれていたギリシャ語に変換しますと「ペトロ」となります。私共は、こちらの方が馴染んでいるでしょう。シモン・ペトロです。彼は「シモン」という、生まれた時から用いている名前とイエス様に与えられた「ケファ」「ペトロ」という二つの名前を持つことになりました。パウロなどはペトロに対して「ケファ」と読んでいました(第一コリント 3:22、9:5、等)。イエス様はシモンと出会ったその時に、ケファと名付けられました。「岩」というのは、動かない、どっしりしているというイメージです。シモンの信仰が揺るがないことを見通して付けられたのでしょう。イエス様は、シモンが弟子となり、彼の色々な言葉や行動を見て、判断して「ケファ」＝「岩」という名を付けたのではないとヨハネによる福音書は告げます。それは、イエス様が神の御子であり、全てをご存知のお方であるということを示しています。私共は自分のことさえ良く分かりませんが、イエス様は全てをご存知です。ですから、この方を信頼して、この方に従って行けば間違いありません。

また、他の三つの福音書では、シモン・ペトロが最初の弟子であり、弟子の筆頭として記されています。そして、そのように呼ばれるようになった場面は、マタイによる福音書ではイエス様が弟子たちに「あなたがたはわたしを何と言うか？」と問われ、ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です。」と答えた時でした。イエス様はペトロに「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわ

たしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」(マタイ 16:18) とまで言われました。ここが、長い間ローマ・カトリック教会がローマ法王の首位権を主張する根拠となっています。ペトロの上に教会は立てられた。ローマ法王はペトロの後継者である。従って、ローマ法王がキリスト教会の最高指導者なのだと言っている分けです。しかし、ヨハネはその様には記しませんでした。兄弟のアンデレの方がペトロより先にイエス様に従った。それは、キリストの教会をイエス様の弟子たちの集団として理解し、イエス様は弟子の中に優劣をつけるようなことをなさらなかったということではないかと思います。すぐに人と比べて、優劣、上下の関係を付けたがるのが人間です。もっとはっきり言えば、私はここに人間の罪がハッキリ示されていると考えています。イエス様の弟子の間では、その様なことであってはならない、そうヨハネによる福音書は私共に告げているでしょう。

5. 何を求めているのか

さて、イエス様に従って行った二人。一人はアンデレですが、もう一人の名前は記されていません。ですから、分からないと言えば分からないのですけれど、ヨハネによる福音書の書き方を考えると、もう一人はこの福音書を記した「使徒ヨハネ」ではないかと言われています。そうかもしれません。

自分の後に着いてくるこの二人に対して、イエス様はこう告げました。38 節「**何を求めているのか**」。自分の後を付いてくるけれど、あなたたちは私に何を求めているのか？とイエス様は告げたわけです。皆さんなら、この問いに何と答えるでしょうか？イエス様について行く。それは何を求めてなのか？この問いは、全ての人に向けて告げられています。イエス様からのこの問いをはぐらかすことは出来ません。もし、お門違いのことを求めているならば、イエス様はきっと「それを私に求めても無駄だ。私はそれを与えるために来たのではない。」そう告げられるでしょう。この時、この二人は何を求めて、イエス様に従ったのでしょうか。彼らは洗礼者ヨハネがイエス様を見て告げた「見よ、神の小羊」との言葉によって、イエス様に従うことにしました。ということは、この二人は、イエス様によってもたらされる神様の裁きが過ぎ越して行くこと、つまり神様の救いを求めていたということです。もし、彼らが「ローマ帝国の支配からの解放」だとか「経済的な安楽」といったものを求めていたのならば、イエス様は「私はその様なものを与えるために来たのではない」と答えられたでしょう。

しかし、この二人の答えは全く意味の分からないものでした。彼らの答えは「**どこに泊まっているのですか？**」というものでした。この答えを聞いて、「ハア？？？？」と思わない人はいないでしょう。何を答えているのか、全く意味不明です。勿論、単純にイエス様が寝泊まりしている場所を知りたいという話しではありません。では何なのか。これは実にヨハネによる福音書らしいと言いますか、1 章 1 節の「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」と告げた時、「言

とは神の御子・キリストのことであるということが分かりませんと、何を言っているのかさっぱり分からないのと同じです。「**泊まる**」という言葉、これは文字通り「泊まる」という意味もありますが、そこに「いる」という意味もあり、さらに「繋がる」という意味もあります。イエス様はどこから来られ、どこにいて、どこに行かれるのか。それを明らかにするということは、イエス様が誰であるかということを明らかにすることと同じだと言うのがヨハネによる福音書の書き方です。つまり、「**どこに泊まっているのですか。**」という問いは、「あなたはどなたですか？神様と共におられ方ですか？そのことを教えてください。」と答えているということなのです。

6. 来なさい、そうすれば分かる

そして、その答えに対してイエス様は「**来なさい。そうすれば分かる。**」(39 節)と告げられました。これは直訳すれば、「来なさい。そして、見なさい。」という言葉です。つまり、イエス様は「私が誰であるのか、私の所に来て、私を見るならば分かる。」とお答えになったということです。この二人は自分の先生である洗礼者ヨハネがイエス様を「見よ、神の小羊だ」と言ったので、その言葉を信じ、イエス様に従ったわけです。しかし、それはイエス様に対しての証言を信じたわけですが、イエス様は「他の人が言ったから信じるということではなくて、私の所に来て、私を見て、本当にこの方は神の小羊だ、神の御子だ、キリストだ。そのことが分からなければ、私についてくることは出来ないだろう。」と言われわけです。

これは、とっても大切な信仰の筋道を教えてくださっています。確かに、私共の信仰の一步は他の誰かの言葉に導かれ、促されて始まります。それが、教会に通い始めた、あるいは聖書を読み始めたという段階です。しかし、その歩みの中で、イエス様とはどういうお方なのか、何をしてくださるお方なのか、私を救ってくださるとはどういうことなのか、そのようなことを一つ一つ知らされていくわけです。イエス様のいる所に自分もおり、イエス様と結ばれて、イエス様と共に歩んで行く中で私共は知らされていくわけです。イエス様は「来なさい」と言われました。イエス様は自分のとこに来なさいと言われました。これは私共に対しての、全ての人に対しての招きです。では、イエス様がおられる所とはどこでしょうか？「それはここです」というように、一箇所に固定出来るようなことではありません。けれども、ハッキリ言える場所があります。それがキリストの教会であり、この礼拝です。ここに集い続けることです。イエス様の言葉を聞き、イエス様が為される御業を見、ここにイエス様がおられことが分かる。私の為に十字架にお架かりくださって、私の一切の罪の裁きを担ってくださった「神の小羊」であることが分かる。それがここです。

7. イエスのもとに泊まる

この時、二人はイエス様の招きに応じて、イエス様について行って、その日彼らはイエス様のもとに泊まりました。どんな家であったのは、どんな食事をしたのか、どんな話をイエス様がなされ

たのか、それは何も記されておりませんので分かりません。と言うよりも、そこで何が話されたかどうか、それは問題ではなかったのでしょうか。もしこの時に、決定的に大切なことが語られたのであれば、それは聖書に記されているはずですが。聖書に記されていないと言うことは、そのことは重要なことではないということです。では、ここで何が大切なことだったのでしょうか。それは、イエス様の所に泊まったということです。それが決定的には重要だったということです。それはイエス様の声を聞き、イエス様の業を見、同じ所に身を置いて共に過ごしたということです。そうすると、彼らはハッキリ分かった。イエス様がメシア・キリストであることがハッキリ分かった。だから、次の日アンデレは兄弟のシモンの所に行って「**私はメシアに出会った。**」(41 節)と言い、イエス様の所にシモンを連れてきたのです。イエス様に会えば、イエス様と共に生きれば、イエス様の言葉を聞けば、イエス様の眼差しを受ければ、イエス様が誰であり、どのような方であるか、どんなに私を愛してくださっているのかがハッキリ分かります。

ヨハネによる福音書において「見る」という言葉は、「信じる」ということと不可分の関係にあります。イエス様が「来なさい。そうすれば分かる。」つまり、「来なさい。そして見なさい。」と告げられたのは、「私の所に来て、私を見るなら、私が誰であるか分かり、私を信じる事が出来る」と言われたということです。このようにイエス様が私共を招いてくださり、私共がその招きに応えることによって、私共のイエス様との交わりとしての信仰の歩みは営まれていきます。信仰は神様・イエス様に対する愛ですから、頭でイエス様のことが理解出来るというようなことではありません。イエス様を信じて、交わりを与えられ、そのようにしてイエス様について初めて理解出来るようになる。そういうものです。理解より信じることの方が先です。信じなければ、愛さなければ、相手を理解することは出来ません。信仰とはそういうものです。私共にとって大切なことは、他の人が言ったことを信頼して始まった信仰の歩みであったとしても、礼拝に集い、イエス様の言葉を聞き、そして従って、祈りつつイエス様と共に生きる。そうすれば、ハッキリ分かる。そして、イエス様のことがハッキリ分かる者とされた時、私共はイエス様のことを伝えないではおれなくなります。そして、たとえ意識していなくても、私共の何気ない言葉や仕草や存在そのものが、キリストの香を放ち、隠しようがなくイエス様を伝える者となるでしょう。そのような者として召されていることを、本当に嬉しく、ありがたく思います。

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。あなた様は今朝、聖書の言葉を通してイエス様がまことの神の小羊あること、そしてイエス様が私共を「来なさい。見なさい。」と招いて下さっておられることを、新しい教えてくださいました。ありがとうございます。どうか、私共がいよいよイエス様を愛し、イエス様をハッキリと知り、イエス様御自身を伝えて行くことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

